

巻頭言

「役に立つこと」と
「役に立たないこと」

比較文化学科長 鄧 捷

文学を研究対象とする人間として、「文学ってなんの役に立ちますか?」とよく聞かれます。ゼミで私と一緒に魯迅などの中国文学を読む学生は、就職活動の面接のときにもこのような質問をされるようです。困りました! どう答えましょう?

役に立たないことの「役」とはなんでしょうか? この問題は、べつに現代人だけの問題ではなく、2000年あまり前の人々が、すでにまじめに考えていたことでもあります。そう、中国の戦国時代の「莊子」という人です。莊子はよく寓話や比喩を用いて、自分の考えとは反対の意見を持つ人物「恵子」を登場させ、二人で議論する形で自分の思想を説いています。その議論のなかに、つぎのような話が残されています。



恵子が莊子に「あなたの言っていることは何も役に立たない」と言った。すると莊子が言った、「役に立たないという意味を本当に理解してから、はじめて役に立つかどうか、ということを議論できます。この大地はもとより広大でないということはないですが、人間にとって必要なのは地に足が着いている部分だけでしょう。もし、仮に、あなたが歩く足の形に合わせて大地を残しておき、残りの全てを黄泉の国まで掘り下げてしまうとして、あなたは、そんな「大地」を役に立つと言えるのですか」。恵子が言う、「役には立たないでしょう」。莊子は言った、「そうやって考えれば、役に立たないことの必要性も明白でしょう」。

(漢文が好きな人は原文をどうぞ。恵子謂莊子曰:「子言無用。」莊子曰:「知無用而始可與言用矣。夫地非不廣且大也、人之所用容足耳。然則廁足而墊之致黃泉、人尚有用乎?」恵子曰:「無用。」莊子曰:「然則無用之為用也亦明矣。」)(『莊子』「雜篇・外物」第二十六より)

莊子は「役に立つ」ことを「用」といい、「役に立たない」ことを「無用」といい、「無用の用」を一所懸命に説いた哲学者です。

踏んでいない地面を「無用」(「役に立たない」もの)とすると、私たちは自由に歩けなくなってしまいます。「役に立つこと」と「役に立たないこと」は、地続きでたがいつながっています。そして、「役に立たないこと」の方も、実に多くの可能性をそのうちに隠しもっており、それこそが、私たちをより自由に、より遠くまで導いてくれるものなのです。

さて、秋学期が始まりました。様々な授業や勉強があります。どう役に立つか、あるいは役に立たせるかは、みなさん次第です。楽しみながら頑張りましょう。

新任教員インタビュー

比較文化学科に新しく着任された三人の先生方に、学生からインタビューを行っていただきました。先生方のこれまでの歩みや今後のこと、さらに意外な一面を発見できます。

相原 建志 先生



① 相原先生は、文化人類学、スポーツ人類学、ポルトガル圏地域研究の三つを専門としておられますが、まずはどの研究から取りかかったのか、研究しようと思ったきっかけについて教えてください。

順序となるとやや複雑ですが、幼少期からずっと中南米に関心があったので、大学入学時に第二外国語としてスペイン語を、三年生から第三外国語としてポルトガル語を履修しました。私の出身大学では三年生進学時に専門を選択するのですが、その際に選んだのが小さい頃から興味のあった、スペイン語圏とポルトガル語圏の研究でした。ただ、このときはまだスポーツ研究とは関係なく、中米グアテマラの文学と社会思想の研究をしていました。

その後、大学院博士課程に入る際に、スペイン語・ポルトガル語圏という対象は維持しつつも、専門領域を文学から文化人類学へ変えました。ただ、さかのぼること学部二年次に文化人類学の授業は履修していたので、専門とする前に基本をすでに学んでいた状態でした。そのため三つのなかでは、文化人類学とポルトガル語圏研究が学ぶのが早かったと言えます。他方、サッカー研究、より広くいえばスポーツ人類学は、三つのうち最後に（博士課程進学後に）始めた研究と言えます。その研究のきっかけは次の項目でお話しましょう。

② ポルトガルの大学院で特にサッカーの研究をしていたきっかけと、その理由を教えてください。

文学研究の時代から読書の幅は広く、サッカー研究も興味本位で勉強していました。しかし、実は現在でもそうなのですが、サッカーの人文社会科学とえば観客やファン、サポーターを対象とした「観る側」の研究が中心で、選手や監督、トレーニングなど、「する側」の研究はないに等しく、当時から大きな不満を感じていました。観客の研究だけでスポーツが理解できるはずなんてない、と。人類学に専門を変え、ヒントになるものを探すなかで出会ったのが、ポルトガルのとある大学で開

発されたトレーニング理論でした。調べるうちにその理論と、その実際のトレーニングの現場を調査することは人類学にとってもスポーツ研究にとっても非常に意義があると考え、ポルトガルでの研究を決断するに至りました。

③ 留学中にもっとも困ったことを教えてください。

正直なところ、とくにありませんでした。メキシコは治安がさほど良くありませんが、犯罪に遭うこともなかったですし、ポルトガルは非常に穏やかな国で、どちらでも生活に困ることはなかったです。スペイン語もポルトガル語も、現地特有の表現やスピードなどに慣れる時間は必要でしたが、学部生時代からかなり鍛えられていたので順応も早かったと思います。とりあえず迷う前に行ってみればなんとかなった、というのが正直な感想です。

ただ、ポルトガルであえて困ったことと言えば、時間の余裕がなかったことでしょうか。留学申請時に研究計画書というものを現地の大学に提出するのですが、私の場合は当地のサッカークラブのトレーニングの人類学的調査というプランでした。そのため、週1回、大学に現地の指導教員に会いに行ったり図書館で調べものをしたりする以外は、ほとんどトレーニングとその準備（プレーの映像の分析など）、関連文献の読書、論文執筆の準備などに充てていました。それ以外の時間がほとんどなかったわけです。

④ 最後に、学生に伝えたいことがあれば一言お願いします。

先に述べたように、私が文化人類学、スポーツ人類学、ポルトガル語圏の地域研究を「本格的に」「揃って」研究し始めたのは、大学院の博士課程からです。しかし、三つとも、一から学び始めたのが決してそのタイミングだったわけではありません。学部一年生から三年生くらいに興味本位ですでに学んでいたことを、今度は本業として学び直したのです。別の言い方をすれば、最初から文化人類学やスポーツやポルトガル語圏を、学者として研究対象にするつもりで学んでいたわけではありません。そうした私のキャリアを踏まえ言いたいのは、学んだことがいつどこで役立つかは誰にも予想できないということ、そして、だからこそできる限り幅広い物事に取り組んでほしいということです。

学生みなさんも、私のように学問の道ではなくとも、もしかしたらキャリアの途中で方向転換するときに訪れるかもしれません。そうしたとき、いろんなことを幅広く学んでおくと、方向転換して何かを学び直そうとしたとき、かなり楽になるはずです。一から何かを始めるよりも、多少なり

ともすでに学んであれば再スタートするのが楽です。そうしたときに本当に訪れるか分かりませんが、しかしそのときに備えて、選り好みせず多くのことにチャレンジする姿勢を持つてほしいと思います。

小滝 陽 先生



① 先生がアメリカについて研究しようと思ったきっかけは何ですか？

好きというのもおこがましいくらい、少しだけ、アメリカの文学が好きでした。アメリカに関心があり、史学科に在籍していたので、アメリカの歴史で卒論を書くことにしました。ところが、私を受け入れてくださったゼミの先生は、フランス近代史を研究しておられました。ほかには、ソ連史を研究している先生にもお世話になっていました。私のいた大学にはアメリカの歴史を研究している方がおられなかったのです。

ある日、ゼミの指導教官であるフランス史の先生に、何がやりたいか考えろと言われました。で、当時、好きで読んでいたフランシス・スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』の舞台になった1920年代アメリカのことを、何か書いてみたいのですがと、おずおず言ってみました。そしたら先生は、「ああ、その時代の話は面白そうだ」と言ってくださいました。優しい方だったと思います。

結局、卒論は「1930年代（!!）ニューディール改革の時代における第三政党運動とジョン・デューイ」という、当初の計画からズレた中身になりました。以来、アメリカの福祉国家や福祉思想について考えることを研究テーマの一つにしています。

② 学生時代はどのような生活を送っていましたか？

これは本当に、あまりよく覚えていません。大学に通って、バイトをしたり、友達と遊んだり、特別なことはしなかったように思います。静かな大学の雰囲気は、金沢文庫キャンパスとよく似ていました。

ただ、出身が北海道の田舎なので、東京近郊での生活をいちいち新鮮に感じたのは覚えています。このころ、気が向いたときに映画を見に行ったり、コンサートに行ったり、寄席に行ったり、美術館

や博物館に行ったり、あとは、文楽（人形浄瑠璃）を見たりといった習慣ができました。どれもめり込むまでにはいたりませんでした。現在でも時々行きます。

あとはやはり、友人との付き合いが生活の中心だったのだと思います。研究者として関係の続いている大学院の仲間を除けば、今でも親しくしているのは、小中高校ではなく、数少ない大学時代の友達なので。

③ 先生が子供の頃になりたかった職業は何ですか？

古生物学者です。
私が生まれ育ったのは北海道の南部にある穂別（ほべつ）というところで、人口5千人にも満たない小さな町でした。今は自治体の合併で「むかわ町穂別地区」になりました。むかわ町という名前なら聞いたことがある人もいますかね。最近では恐竜の全身骨格化石が発見され、「ムカワリュウ」という名前で盛んに報道されています。たしか現在（2019年9月）も、上野の国立科学博物館に標本が来ているはずです。この化石が見つかったのも穂別です。

さておき、私が子どもだった1980年代の穂別町は、まだ恐竜こそ見つかっていませんでしたが、海生爬虫類やアンモナイトなどの化石が豊富に産する場所として有名でした。特にクビナガリュウの化石が有名で、「ホッピー」という愛称がついていました。（今思うと麦芽飲料みたいな名前です。）クビナガリュウは恐竜ではありませんが、貴重な化石であることには変わりありません。「町おこし」のためもあったでしょうが、過疎化が進む、小さな元炭鉱町には不釣り合いなくらい（失礼）立派な町立の博物館に、全身骨格のレプリカが展示されていました。

当時、その博物館は、年齢を問わず1回わずか50円で入館できたはずです。それなのに、観る人を「舐めた」感じの「箱モノ」ではなく、本物の化石やレプリカが詳細な解説とともにたくさん展示され、学問としての古生物研究にあこがれを抱かせる、志の高い場所だったと思います。子どもの記憶なので美化されているかもしれませんが、大人になってから再訪した時にも同じ印象を抱いたので、それほどずれた記憶ではないはずです。とにかく何度も通いました。おかげさまで、私にとっ

ては、恐竜と同じころに生きたクビナガリュウやモササウルス、アーケロンなど、巨大な海の生き物が身近な存在になりました。

当時はちょうど恐竜に関する知識が更新され始める直前の時期でした。恐竜に羽毛があったことはまだ知られておらず、図鑑にはゴジラのように直立するティラノサウルスやアロサウルスのイラスト

が描かれていました。でも、恐竜絶滅の原因は巨大隕石の衝突であるという最新の説が紹介されて、子どもなりに驚いたりしました。この頃の話を始めるときりがありませんね。

いつの間にか、「恐竜博士」の夢は忘れてしまいました。

西尾 和己 先生



① 西尾先生が日本史について研究しようと思ったきっかけを教えてください。

私の専門分野は日本の中世（12～16世紀ころ）における寺院の歴史です。

大学院で中世史を勉強しようと思ったのは、大学三年の冬ころですね。レポートのためだったか、地元の岡山の歴史について図書館で調べたんです。そのとき、私の親の実家が県北の新見（にいみ）という所なんですけど、実はそこに中世には荘園があって、しかもいつも里帰りのときに自動車を通る道沿いに市場があったことがわかったんです。その道って、夜なんてほんとに真っ暗で人もほとんど見かけない場所なんですけど、そこに昔は市場があって、人々が集まってにぎやかだった。そのギャップになんとも言えない不思議さを感じたんですね。そういった体験もあって、中世史を勉強してみるか、となりました。

大学院に入ってから、いろいろ考えたすえに、結局寺院の歴史に興味を持ちました。きっかけは京都の東寺にいるお坊さんたちの会議の議事録を読んだのが大きかったですね。これを見ると、社会が流動的で不安定ななかで、お坊さんたちが宗教的な活動だけでなく、寺院の財政や治安維持などいろいろ苦勞しつつも対応していこうとする様子がよくわかるんですね。ところが、当時の研究者は、こういった対応を寺ができた当初の原則を曲げてしまうものとマイナスに解釈したりして、寺院は堕落しているとする評価が一般的でした。でもそのわりには、この時期のお坊さんたちの行動を正面から検討するという作業は不十分で、評価だけがひとり歩きしているように思いました。そこに私は違和感を感じたので、お坊さんたちの行動をあらためて整理してみようと思いました。

② 先生から見た比較文化学科の雰囲気はどのようなものでしょうか。

学生と教員の距離がとても近いということですね。どの先生に話を聞いても、学生が気軽に研究室をたずねてくるという雰囲気があって、その点はとても新鮮です。なんでそう思うかという、自分が大学生のときを思い返しても、大学の先生と一対一でゆっくり話したこともなかったし、大学の先生の研究室なんて行ったこともなかったからです。その点で私にとって大学教員って遠い存在でしたね。大学院に入ってから、さすがに指導教授に研究や事務的なことでいろいろと話す機会こそできるようになりましたけど、特に私の所属したゼミでは、院生それぞれが個人事業主のように独自に活動する雰囲気だったこともあって、大学教員とは一定の距離感を保っていたような気がするんです。

ただ、研究室に学生が訪ねてきてくれるのは教員としては単純にうれしいことなので、今後もそんな雰囲気が続くといいなと思いますね。

③ 今後はどのようなことを研究される予定ですか。

京都・奈良のお寺についての研究は今後も続けていくつもりですが、せっかく鎌倉・六浦、そして横浜という歴史ある地域のなかにある関東学院大学で仕事をする機会を与えてもらったので、この地域の歴史についても勉強していきたいなと思っています。

なぜそう思うかという、私たちって、毎日生活していてもあまり変化というものを実感できない。でも実際にはいろいろな変化は起きていて、それを自覚させてくれる学問が日本史だと思うんです。そのなかでもっとも変化を実感しやすいのって、さきほどの新見の話もそうなんですけど、やっぱり自分たちが毎日生活している地域だと思うんです。だから、学生のみなさんに日本史のそういった面白さを伝えるためには、鎌倉・六浦、横浜といった地域の歴史から伝えるのがいちばんの近道なんじゃないかと思うわけです。ただ、そのためには、私自身がこれから勉強しないといけないんですけどね。がんばります。

2019年度ワールドスタディ1 (フランス)

パリを(再)発見する

比較文化学科教員 八幡 恵一

8月22日、参加者の学生を連れ、蒸し暑い日本を離れてパリへ向かった。到着後すぐはひんやりとしたパリの夕べの空気にふれ、快適な日々を過ごせることに胸がふくらんだが、実際は、6月から7月にかけてフランスを襲った（という表現がまさに正確な）酷暑の余波もあってか、日中は連日35度に迫ろうかという気温で、翌日に早くも期待は裏切られることになる。それでも、湿度は低く夜はやや肌寒いくらいであり、なにより滞在中ずっと天候に恵まれたことは幸運であった。

私自身、久しぶりのパリで、どのような変化があるか不安と期待の入り混じった気持ちだった（不安はとくに学生を引率するという立場もあって大きかった）が、表面上はよくも悪くもほぼ変わりなく、かつてと同じ感覚で学生を案内することができた。もっとも怖いのはスリにあうことだったが、これも徹底した注意により、学生の言葉によれば、「その気配すら感じる事がなかった」。もっとも、気配を感じさせてしまったらスリはできないのだが。

パリでは、およそ名所という名所を回った。たんなる観光とはならないよう、学生には事前の学習で回るべきところについて、おもに歴史を調べてレポートを作成させた。そもそもパリのいわゆる名所は、ほとんどが美術館、博物館、あるいは歴史的建造物の類であり、観光＝勉強になることが、パリのいい（？）ところである。学生はみなはじめてのパリで、浮かれるのはしょうがないと思っていたが、いずれの場所でも熱心に、自分の知識と現地の様子やそこで学んだことを照らし合わせ、その距離というかずれを測っているようであった。8月27日まで滞在したが、ワールドスタディの名にふさわしい経験を積めたと思う。

さて、学生がパリでなにを学んだかはこのあとのレポートに任せるとして、私自身がそこであらたに発見したものについて書いてみたい。ひとつは、学生のひとりが文化人類学に興味があるということで向かった人類博物館である。近くにあるケ・ブランリ美術館（こちらも行った）の縮小版程度に考えていたが、実際はコンセプトの異なる非常に興味深い場所だった。なにより、かねてからそれはもう実物を拝みたいと考えていたデカルトの頭蓋骨を拝めたことが、私にとって（あくまで私にとって）今回の研修で一番の収穫だった。

もうひとつは、現地の大学で日本語を教えている私の友人に行ったインタビューで、フランスの大学入試の現状を聞いたことである。詳細はいずれ授業のなかで話したいと思うが、「え、そうなの？」ということがいくつかあり、大変参考になった。その友人には学生からも質問をさせ、日本とフランスの文化の違いなどを学ばせてもらった。

ワールドスタディの一番の目的は、その国の文化について、授業で学んだ（いわば机上の）知識と、現地の実地の様子とのずれを認識することにあると思っている。とくにパリは、きらきらと光り輝く「花の都」のイメージが強いだけに、そのずれの大きさに驚くことのできる格好の場所だと思う。学生たちがそこで驚き、ずれとして感じたものが、彼らの今後のモチベーションや発想の源になれば幸いだ。



ルーヴルの城塞跡



デカルトの頭蓋骨

フランスの文化と美術館 ————— 比較文化学科2年 森 結香里

8月後半の一週間、ワールドスタディでフランスのパリに行ってきました。まず、事前の集中講義で訪れる場所とスケジュールを決め、その場所の歴史や成り立ちについてレポートを作成しました。現地では、作成したレポートで学んだ内容と実際の様子を比較して、なにがどのようにちがうのかをひとつひとつ確認しながら研修を行いました。またそのなかで、自分がそれまでもっていたパリのイメージとはかけ離れたものを見るのが何度もあり、勉強になるとともに、驚くことも多かったです。

研修の前半は、オペラ座やルーヴル美術館、ヴェルサイユ宮殿、オランジュリー美術館、ロダン美術館、アンヴァリッドなどを訪れ、数多くの美術・芸術品を鑑賞しました。いずれの場所も、とにかく規模が大きいというのが印象で、とくにルーヴル美術館は、あまりに広大で地図がなければ迷ってしまうほどでした。これほど多くの芸術品をひとつの場所に集めるということが、どのくらい大変なことで、そこにはどのくらい長く複雑な歴史があるのか、レポートで調べてはいたものの、あらためて考えて目がくらむようでした。

後半では、私がとくに行ってみたいと思っていたケ・ブランリ美術館と人類博物館に足を運びました。大学で文化人類学の授業を履修しており、その関係で、文化人類学と美術品の関係に興味があったのですが、ケ・ブランリ美術館は、これまで見てきた豪華で美しい芸術品や装飾、建築とはまったく異なる、ヨーロッパ以外（アフリカ、中東、アジア、オセアニア、アメリカ）のちょっと異様な彫刻、道具、像、衣装などを所蔵しており、とても新鮮かつ衝撃的で、世界中の文化の多様性と豊かさを感じることができました。先日亡くなった、美術館の創設者のシラク元大統領が、「文化には序列がない」ということを示すため、また、いわゆる美術品以外の作品に正当な芸術的価値を認めるために、この美術館を開設するにいたったらしいのですが、その役割を十分に果たしていると思いました。

他方で、人類博物館の方は、「人類の進化」をテーマに、展示品のより科学的で実証的な価値を前面に押し出しており、世界中の身近な生活の道具（ほとんどは私たちが見たこともないもの）から、生物の頭蓋骨、人体模型、動物の剥製にいたるまで、たくさんの興味深いものを見ることができました。美術館というよりは本当に博物館といった感じでしたが、「私たちはいったい何者で、どこから来てどこへ向かうのか」という、人間の本质にかかわる疑問が掲げられ、訪れた人たちがその問いについて考えられるよう、面白い工夫が数多く凝らされていました。なぜ同じ人間のあいだでこれほど多くの違いが生まれるのか、あらためて考えさせられました。

そのほかにも、車でオーケストラの生演奏をする人たちを見たり、パリで日本語を教えている方から日本とフランスの学生の様子の違いを教えてもらったり、中東の料理であるクスクスを食べたり、日本ではできない経験をいっぱいさせてもらえました。この経験を今後の勉強に生かしていきたいと思います。



ケ・ブランリ美術館の外観



ケ・ブランリ美術館の展示品

2019年度ワールドスタディ2 (韓国・ソウル)

大韓民国・ソウルの現地研修は、8月26日から8月31日、5泊6日で行われました。

参加学生は5名（2年生1名、3年生4名）。

研修では、韓国の韓信大学日本学科のジャン・ジスさんとイ・スジョンさんにサポートをお願いしました。

研修では、①朝鮮王朝の歴史と文化（景福宮などの王宮、国立民俗博物館、国立故宮博物館、国立中央博物館、国立ハングル博物館）、②南北分断の歴史と現実（軍事分界線・38度線の板門店、戦争記念館）、③日本植民地統治と独立運動（西大門刑務所歴史博物館、3.1独立宣言のタプコル公園、従軍慰安婦問題の水曜集会）などを学びました。

以下に、参加した学生の感想を紹介します。

(比較文化学科教員 大内憲昭)

・景福宮を訪問して

景福宮は1395年に太祖・李成桂によって建てられました。壬辰倭乱の際に多くの建物が焼失しましたが、高宗の時代に再建されました。しかし高宗の王妃の明成皇后殺害事件が起こり王宮としての機能を失いました。

高層ビルと車の行きかう道路の目の前にそびえたつ景福宮には、非常に強い存在感があり、また他の王宮に比べて、より多くの人で賑わっているという印象を受けました。朝鮮王の使用した部屋や宴会場などを見学し当時の情景を想像するのが、非常に感慨深かったです。さらに、明成皇后が殺害された現場である乾清宮や、景福宮と隣接する大統領官邸を見学した際には、景福宮は韓国国民にとって重要な意味を持つ場所なのだなと感じました。



景福宮の光化門



韓国大統領官邸の青瓦台

(比較文化学科3年 伊東百穂)

・雲岬宮

雲岬宮は王室文化の殿堂である。

時代：1864年（高宗1年、1996年改修）

所在地：ソウル特別市鍾路区三一大路464

ここは李氏朝鮮第26代国王の高宗が王位に就く前に暮らしていた潜邸で、父親である興宣大院君の李昰応の邸宅。

・感想

見た目は白と黒を基調としたカラーリングであり、韓国宮殿のイメージを覆すシックなデザインだと感じた。殿堂は四つの建物が集結しており、建物の大きさや広さはあっても守られているような安心感があつた。老安堂は宮殿にも引けをとらない風格が感じられ、老楽堂はオンドル、廊下があり、室外へ出なくても二老堂に行くことが出来る。二老堂も同じ母屋であるため、老楽堂と似たつくりをしている。兵士が使用した守直舎もある。

王族が使用する部屋にはオンドルがあり、対して兵士の使用する部屋にはなかったことから身分の差を感じた。

・水曜集会

日本軍『慰安婦』問題解決全国行動。元慰安婦、支援者たちが日本政府からの公式謝罪および法的補償を要求するため、毎週水曜日に在大韓民国日本国大使館前で行われることから、「水曜集会」と呼ばれている。1991年8月14日、韓国で初めて慰安婦であった名乗り出た故・金学順さん。1992年1月8日に最初の水曜集会が行われ、私たちが参加した8月28日は1402回目でした。



・感想

韓国人の方々の力強いスピーチが行われ、熱意を感じた。プラカードが配られ、そこには「日本に行くな、日本のものを買うな」という内容もかかれていた。日本人女学生のスピーチもあり、「この事実を伝えていかなければならない」と話していた。とても堂々としていて、彼女のスピーチの後には拍手喝采だった。途中二名の女性が曲に合わせて踊っていたが、どういう趣旨なのか分からずじまいだった。

韓国の日本に対する思いや願いなど、肌で感じる事が出来た。

(比較文化学科3年 齋藤真帆)

・西大門刑務所歴史博物館

ソウル特別市西大門区にある刑務所跡地であり、1908年10月に設立された日本人が設立した朝鮮半島初の近代的刑務所である。独立後は韓国政府に渡り名称を「ソウル刑務所」に変えている。当時では韓国人刑務所や死刑場として使用されており、独立運動に関係していた運動家たちも収容されていた。

今まで私はこの刑務所のことや韓国植民地時代のことについてはあまり知らなかったが、今回訪問して興味が湧いた。実際に行われていた拷問の様子や牢獄の中を表現した蠟人形などを見て、想像よりも酷いことが行なわれていてとても心が痛かった。この訪問を機に日韓関係を考えるときに歴史的観点からも考えてみようと思うきっかけにもなった。

(比較文化学科3年 小池恵理香)

・板門店を参観して

板門店とは、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の境をなす休戦ライン上の要地であり、正式名称は共同警備区域（JSA）。1953年に朝鮮戦争の軍事休戦協定がここで締結された。実際に行ってみると、物凄い緊張感と張り詰めた空気に圧倒され、よくテレビで見ていたままの水色の建物を生で見ることができて感動した。文在寅大統領と金正恩國務委員会委員長が手を繋いで各国の国境を越えた石段も間近で見ることができた。しかし、二人が会談した徒歩の橋にいける予定であったのに、北朝鮮側にある板門閣に中国人の観光客が来ていたため、急遽私たちは板門店ツアーを切り上げる事になった。このように、板門店は何が起ころうともおかしくない、予測不可能で非常に危険な場所であることがわかった。

(比較文化学科2年 近藤有紗)

・板門店に行く

ワールドスタディ4日目の8月29日に、私たちは板門店へ行きました。板門店とは北朝鮮と韓国の軍事境界線がある場所のことで、2018年4月に韓国の文在寅大統領と北朝鮮の金正恩委員長が南北首脳会談を行った場所でもあります。

この軍事境界線は1950年に勃発した朝鮮戦争の休戦によってひかれました。日本で育った私にはこの境界線がとても新鮮で、境界線の向こう側が北朝鮮だということが少し不思議でしたが、約65年前までは1つの国だったのがこの線によって今は2つに分かれているという事実に改めてショックを受けました。セキュリティが非常に厳重で、禁止事項も多く、生半可な気持ちで行ってはいけない場所ですが韓国、北朝鮮に興味を持っている方は是非行くべき場所だと思います。

(比較文化学科3年 土本桃花)



韓国側から見た板門店
(青い建物は会議場)



2018年4月27日、南北首脳が軍事分界線を挟んで握手を交わす



コンクリートが軍事分界線



韓国側から見た板門店の会議場



世宗大王像の前で



夜の明洞で

春学期集中講義「外から見た日本」レポート

比較文化学科長 鄧 捷

8月6日から9日まで、春学期集中講義「外から見た日本」が開講され、今年度は、中国の陝西師範大学外国語学院日本語学科から、許賽鋒先生を講師としてお招きしました。許先生は、日中関係史、近代日本の歴史と政治を専門とする研究者です。授業は、「中国人から見た日本のイメージ」をテーマに、古代から近代、日清戦争、日中戦争、80年代、そして現在までの、中国における「日本像」の展開の歴史をたどる壮大な内容でした。15名の学生が授業に参加して、熱心に先生の話の聞き、日本と中国の関係について多くのことを学びました。ぜひ今後の勉強に生かしてもらえればと思います。



中国語資格試験対策講座体験レポート

比較文化学科長 鄧 捷

比較文化学科では例年、春休み期間中の五日間を利用して（今年度は3月25日から29日まで）、中国語履修者を対象に、中国語資格検定試験（HSK）のための対策講座が開かれます。HSKは中国政府公認の検定試験で、合格すれば、留学するときや就職活動のときに大きな助けとなります。毎年たくさんの比較文化学科の学生がこの対策講座に参加して試験に臨み、級（難易度順に1級から6級まであります）を進めています。さて、今年の参加者はどうだったでしょうか。参加者のひとりに体験レポートを書いてもらいました。

.....

HSK 講座に参加したことで、大きな自信を得た状態で検定試験に挑むことができました。講座では、忘れていた一年生の授業内容の復習から、二年生で習った内容の応用、試験問題の細かい対策まで、たくさんのことを教えてもらいました。過去の問題集を解いていくたびに点数がどんどん上がり、成長を実感できたことが嬉しかったです。とくに、五日間ずっとネイティブの先生から中国語を学べたことは本当に大きかったと思います。毎日中国語を聞き続けることで、耳が少しずつ中国語に馴染んでいきました。言葉というのは、やはり毎日使うことで身につくものであると強く感じました。

講座を通じて、もっともっと中国語の勉強を頑張ろうと思いました。今回の経験を旅行や留学の際に活かしていきたいです。

（比較文化学科2年 松本碧）



日本語パートナーズ体験レポート

比較文化学科4年 佐藤 弥妃乃

私は、2018年8月から2019年3月まで、国際交流基金の「日本語パートナーズ」に参加しました。日本語パートナーズは、アジアの中学・高校などの日本語教師や生徒のパートナーとして、授業のアシスタントや、日本文化紹介を行います。私はインドネシアに派遣されましたが、派遣が決まった時点では、そもそもインドネシアってどこ？何語で話すの？危なくないの？など、たくさんの疑問を抱えている状態でした。しかし派遣前に日本で一か月間の研修があり、そこで現地での生活に必要な知識や情報を教えてもらえたため、最終的には安心して渡航することができました。

私が実際に現地に派遣されて得られた重要な経験は、大きく二つあります。まずひとつは、ほかならぬ自分自身をリソースとして日本を伝えられたこと。そしてもうひとつは、自分自身が「外国人」になったことです。

日本語パートナーズの応募要件には、教員としての経験や資格はありません。日本国籍をもつ満20歳から69歳の人なら誰でも参加できます。派遣校の授業で、自分が二十年近く見てきた日本を紹介する、たんにそれだけのことが、現地の高校生にとってはこんなに貴重な情報になるのかと思うことが何度もありました。例えば、自分の高校の写真を見せるだけで、生徒たちは大興奮です。日本では当たり前のようにありますが、インドネシアの高校には体育館やプールがありません。逆にインドネシアでは必ずモスクがありますが、日本にはありません。このように、私がこれまで経験してきた本当になんでもないことが、生徒にとっては、SNSなどでは知り得ない、とても貴重で興味深い情報になるのです。

また、現地で「外国人」になったことも大きな経験でした。日本でもたくさんの外国人を見かけるようになりましたが、彼らがどんなことで悩んだり困ったりするのかなど、これまで考えたこともありませんでした。当然といえば当然ですが、外国では、挨拶の仕方から、食文化、時間の概念や宗教に対する考え方で、すべてのことが自国とは異なります。現地では、やはりこのような文化の違いに悩まされることが多々ありましたが、でもそのおかげで、いまでは日本にいる外国人をサポートする仕事がしたいと考えるようになりました。

「日本語パートナーズ」は、行けば必ずなにか得ることの出来るプログラムです。興味のある方はぜひ！



左が佐藤さん



現地での授業の様子



イベントで生徒からプレゼントをもらう佐藤さん



現地学校の食堂の様子

留学体験レポート

異文化に肌で触れた7か月間——比較文化学科3年 笹島 和実

7か月間のアメリカ留学でのもっとも大きな学びは、大学生活の日常に密着した文化のなかにあったと思います。観光や旅行ではわからない、その国のなまの文化を肌で体感したいと思い、期間が長く、かつ日本人が少ないニューハンプシャー大学（UNH）へ留学することを決めました。このUNHは、私のように海外から学びに来る人が大勢いて、学生の出身国がバラバラ、また大学院生の割合も多く、とてもグローバルな環境でした。UNHで過ごすなかで、特に日本とは違うと感じた点がありました。それは、大学・クラブ主催のイベントがたくさんあるということです。日本の大学とは異なり、無料で参加ができる非常に多くのイベントがありました。イベントの種類は様々で、野外での映画鑑賞会から、ハロウィンやバレンタインの季節にあるビンゴ大会まで、とても楽しいイベントが数多く用意されていました。くわえて、世界各国の年中行事のイベントや、LGBTQ+関連のものなど、学ぶことを主体とするイベントも同じくらい開催されていました。イベントの数にも驚きましたが、それ以上に、大学で過ごす授業以外の時間のなかで、気軽にものごとを学ぶ機会がたくさん用意されているという点に、日本とアメリカの大学生活の違いを感じました。アメリカでは寮生活が主流であるため、つねにキャンパス内で生活することになります。日本では珍しいその環境が、イベントの開催や、またイベントへの参加のやすさにつながっているのではないかと思います。

この他にも、現地で生活しながら授業を受けることで、文化の違いをふくめてたくさんの発見をする機会があり、今まで自分が当たり前で過ごしてきた日本の環境を、あらためて考え直すことができました。慣れ親しんだ生活のなかにいる状態で、自分が置かれた環境や文化について客観的に考えるということは、なかなか容易にはできないと思います。今回の留学で、当初の目的であったアメリカと日本の文化の比較ができただけでなく、自分の知らなかった、アメリカ以外の国の文化や伝統行事についても知るきっかけを得ることができ、さらに、自分自身の文化を見直すことができたのは、大きな意味があったと思います。日本に戻ってからも、日本の「文化」について、アメリカで得た新たな観点と共に、あらためて考えているところです。



最前列の真ん中左が笹島さん

アメリカ留学で得た行動力——比較文化学科3年 山本 みなみ

私は大学2年次の8月から12月までの4か月間、アメリカのオレゴン州にあるリンフィールド大学に留学しました。小さい頃から英会話教室に通っていたこともあり、英語には親しみがありましたが、2020年の東京オリンピックを訪れる外国人観光客のサポートをするツールとして、しっかりと英語を学びたいと思い、留学を決めました。また、現地で100人以上の友人を作ることをもう一つの目標として掲げ、日本を飛び立ちました。

留学最初の1週間はホームステイをしました。私のホストマザーは過去に何人もの日本人留学生を受け入れた

ことがあり、彼女がたくさん質問を振ってくれたので会話に困ることはほとんどありませんでした。ですがこのときは、会話というよりもたんなる「質疑応答」でした。このホームステイでの後悔を繰り返さないため、2週間目からの寮生活では、ルームメイトや語学パートナーと会話の練習をしたり、食堂やイベント、地域ボランティアに参加するなどして、自分から積極的に外国人とコミュニケーションを取るよう心掛けました。自分から行動を起こしたことで、次第に外国人の友人が増え、様々な国の文化について知ることができました。

勉強については、当然ですが授業は全て英語で行われます。くわえて、毎日たくさんのプレゼンテーションやテストが課され、正直に言って本当にきつかったです。分からない問題や言い回しなどが出てきたときは、必ず先生や語学パートナーに質問するようにして、何とか乗り切りました（みんな丁寧に教えてくれました）。また日本の大学と違って、4つの授業がそれぞれ週2、3回ずつあるという時間割で、アウトプットする機会も多く、自分で実感できるほど英語力がぐんぐん伸びていきました。その結果、学期末には、成績優秀者に贈られる「ディーンズ・リスト」に名前を載せることができました。日々の成果がこうして目に見えて現れたことで、大きな達成感を味わうことができました。

大学のダンス部に所属して、フットボールの試合のハーフタイムショーでパフォーマンスをしたり、ハロウィンの時期にはパーティー会場で人生初のフラッシュモブをしたりと、勉強以外の活動にも積極的に取り組みました。ダンス部の練習は週に2回あり、午前5時からトラックを3周走った後、室内で7時半までみっちり筋トレとダンスレッスンを行います。走ることに苦手な私にとっては過酷なメニューでした。練習のある火曜日と木曜日の朝はいつも憂鬱でしたが、約4か月のあいだ、1回も休まずにやりきることができ、身も心も鍛えられたと思います。

もともと周りの目を気にして何をするのも怖かった私にとって、自分から声をかけて話をする（それも外国で）は、とても勇気のいることでした。しかしこの留学中に、たくさんの外国人の友人と出会い、彼らと文武両道を貫いたことで、積極性と行動力を身につけることができました。留学で得られた成果は、私の当初の予想をはるかに超え、いままで気づかなかった自分の長所に気づくことができました。大学生のうちに自分の知らない本当の自分を見つけてみたい方、すぐに行動を起こしてみてください！



手前で下から顔を出しているのが山本さん